

2013年3月3日マタイ 6:5-8「祈り＝神への完全な信頼」

前回から一連のシリーズでの教えに取り掛かっています。すべて同じテーマであります、「施し、祈り、断食」という3つの具体例をもって、イエス様の教えが展開されています。その主題は6:1にある言葉です。「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。」人の前で、人からの評価を求めて善行をしないようにしなさいと言われていました。当時のユダヤ社会においては、施し、祈り、断食というのは代表的な善行で、これをしっかりと果たしている人は、敬虔で信仰深い人として尊敬を受けました。でもイエス様は、そういう人からの評価を求めるのはもうやめなさいと言われるのです。それは、私たちの窮屈な心を解き放つ解放の福音であるとも申しました。

人の目を気にして、人からの評価に一喜一憂して、くじけたり悩んだりしている。あるいは、自分がだれかのためになしている一生懸命な奉仕や愛の業に、何の見返りもない、感謝もされないと悲しんでいる。そういう気持ちは誰にでもある。イエス様はよく分かっています。でもよくご存じの上で、さあ、もうそんなことを気にするのはやめなさいと、心を高く引き上げてくださるのです。人からの尊敬や信頼、人気、名誉・・・そりゃあそういうものは、あればあったほうがいいに決まっています。こちらが示した好意に感謝をしてもらえましょう。でももっと大きなこと、もっと高いことを考えなさいとイエス様は言われるのです。あなたの天の父である神にほめていただくこと。御国でお会いする時に、「お前はよくがんばった」と父に抱きしめられてくしゃくしゃにほめていただく、それを求めていこう。それこそ永遠に輝き続ける評価です。そして、神は隠れたところまでちゃんと見ていてくださる方であって、私たちのなした善行が、たとえ誰からもほめられなくても、神は見ていてくださる。ほめてくださる。だから、人からの評価など、一切考えなくていい。そこから自由になりなさいと、イエス様は私たちを招いてくださるのです。

今日は二番目の「祈り」という善行についての教えに耳を傾けていきたいと思うのですが、この当時のユダヤ人は日に三回神殿に向かって祈ったと言われます。ここではそういう祈りのあり方についての問題が取り上げられております。

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らはすでに報いを受けている。」

まず最初に確認しておきたいのですが、この教えは、「祈るな」ということでは決してありません。クリスチャンであれば、熱心に祈るということはむしろ前提なんですね。偽善的な祈りかどうかなんてことは、熱心に祈っている人々の中でこそ問題になるものです。主イエスも当然よく祈られましたし、神の民にとって「祈り」というのは生命的な行為です。まだキリス

ト教信仰をご自分のものとしておられない方もいらっしゃると思いますが、そのような方々にもぜひ覚えていただきたいのですが、「祈り」という行為は本当に大切に、本来決して赦されない、ありえないような特別な権利として神から与えていただくものであります。

祈りとは神との語り合いであります。神とのロマンスなんて言う人もおりますが、でも本来私たちは、神に近寄ることも、交わることも赦されない罪人であります。それなのにイエス・キリストの十字架の贖いによって神と和解させていただいて、正しい関係が回復される。そういうキリストのとりなし・仲保によってはじめて神との語り合いという特権が与えられるのです。だから神に親しく近づいて祈ることができること、それ自体が奇跡なのです。神に語りかけ、祈りを聞いていただく、これは当たり前のことじゃない、ありがたいことなのです。神に語りかけることができる、祈りが聞いていただけるという特権は、イエス様がその十字架の血によって獲得し、私たちに与えてくださった最上の賜物です。そしてそれはそういう命がけのプレゼントである以上、もう決して誰にも奪うことはできないのです。私たちの両手両足を封じようとも、さるぐつわにしようとも、私たちから祈りを奪うことのできる者はありません。あるいは病床でも動くことができなくなっても、祈ることはできるのです。いやもっと言えば、年老いて認知症などで記憶を失い、言葉を失い、はたから見ればもう祈ることさえできなくなってしまうように思える時もあるかもしれない。でも、そんな病も老いも、私たちから祈りの特権を奪うことはできません。たとえ、もう言葉を発することはできなくても、声にならぬ祈りを聖霊が導き、主イエスが父に執成していてくださると、私たちは信じていいのです。そういう風に祈りとは、私たちと三位一体の神との、決して切れることない最後の絆として与えられている大きな大きな特権です。そうである以上、言葉も記憶も明瞭なのに、こういう祈りの特権を有効に用いないのはダメですね。

問題は祈りの心のありかたです。それが、人の目を気にしたものになってしまっただけではないかどうか。偽善者のようであってはならないとイエス様は言われます。前も申し上げましたが、これは元来、ギリシャの演劇で用いられた「俳優」という言葉です。表と中身が違う俳優のような振る舞いが偽善だとされる。それは自己演出をしている状態。自分がどのような自分として見えるか、自分の見せ方に心を裂いている状態。この場合であれば、祈る人としての自己像をちゃんと確立できているかどうか、確認することに心を裂いている状態です。

それはもちろん、なにより他者へのアピールとしてなされる自己演出です。先にも言いましたが、ユダヤ人は9時、12時、15時と三回祈ります。神殿でラップがなると、どこにいても祈ったのです。私たちみたいに手を組んでちっちゃく縮こまって祈ったりしません。両手をあげてオーバーアクションで祈ったのです。そうやって聞きますと、漫画的な、あからさまなアピールのように思えますが、必ずしもそういうことでもなかったろうと思います。それはあくまでも身体表現の違いであって、ユダヤにはユダヤの霊性があります。そのことよりも、会堂や大通りの角という人目につくところをわざわざ選ぶというのが問題なわけですね。そういう

アピールというのはある面では必要でもあるのです、民衆からの信望厚いファリサイ派律法学者たち、彼らの祈りの姿勢が、民族の霊性を導く模範となるのですから。自分たちの敬虔をしっかりアピールするということは、霊的指導者として、必要な義務だとさえ言えるかもしれません。でもそこに歪みが生まれてくる入口があるのです。イエス様はその危険を指摘しておられるのです。私も身につまされます。牧師になると、祈りの生活を促すために、自分はこのようにしていると模範を示さないといけないという思いがある。そこにはやっぱり歪みの根があることを認めざるを得ない。神への純粋な熱心ではなくて、立派な牧師さんだと人から評価されたい、信徒の方々に信頼されたいと。

そういう歪みの根は取り去ったほうがいいのです。だからイエス様は言われます「奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい」。

ここで自分の部屋と言われているのは、パレスチナの農家にはどこにもあった農作物の貯蔵室で、窓もない小部屋だったという。そこに入りなさい。こういうイエス様の教えを現実化していこうということで、密室の祈りが奨励されたり、祈祷室なんかがある教会もあります。それはそれでいいことだと思うのですが、ただここでの問題は場所がうんぬんということではないということは覚えておきましょう。そういう奥まった自分の部屋をなんとか用意しなきゃなんて思わなくていい。そうではなく、私たちは誰の目も気にせず祈ることができるなら、そこはどこであろうとも奥まった自分の部屋となるのです。そういう祈りへの集中を確保しなさいとイエス様は言われます。そしてこの場合の部屋のイメージというのは、明るい部屋ではなくやっぱり暗い部屋です。戸を閉め切って、光が入ってこないような暗い部屋をイメージするのがいいと思います。それは、他者から隠れるのみならず、自分からさえも隠れることのできるような、奥まった暗く静かな場です。

真っ暗な部屋というのは自分で自分が見えなくなるものです。右の手がすることを左の手が知らないというのと同じで、自分が何者で何をしようとしているのか、どういう者であろうとしているのか、そういうことがまったく見えなくなる。自分がどこに立っているかも分からなくなる。そんな真っ暗な部屋に行きなさいと、イエス様は言っておられるように思います。そういう真っ暗な部屋では、もう恰好をつけることもできません。これまで一生懸命自己演出して、色々気負って、こうでなければならぬ、ああでなければならぬと、確立しようとしてきた自分がまるで見えなくなってしまう、そんな真っ暗な部屋で祈りなさい。自分を捨てて、自分を見るのをやめて、真っ暗な部屋で祈りなさい。そこでこそ、本当の祈りがはじまるのです。そんな真っ暗な部屋に、神はおられるからです。

この真っ暗な部屋のイメージは、私にとっての祈りの原体験でもあります。私をはじめ、イエス・キリストの父なる神に祈ったのは、まだ洗礼を受ける前のことです。当時私は新入社員の営業マンでしたが、非常に厳しい上司に気に入られてしまいまして、猛烈なスパルタ教育を受けておりました。最初は愛のむちだと感謝して、負けるもんかと頑張っていたのですが、だんだんしごきがエスカレートする中で、人格を否定されるような言葉も浴びせられて、本当

に憎くなってきてしまいました。そしてある晩、自棄酒でべろべろに酔っ払って、その方への憎しみが心の中に満ち溢れた時に、教会で教えてもらった「罪」ということが頭によぎった。私の中に罪がある。おぞましい化け物がすんでいる。そう思った。そしたら、相当酔っていたんでしょう。急に足もとを引きずり込まれるような感覚に襲われました。罪に呑み込まれる、と思いました。怖くて不安で、どうしようもなく惨めで、その時はじめて、「助けてください」と祈りました。教会で皆さんがしているように、声を出して「神様、助けてください」と言ってみました。それは、自分にとっては革命的な出来事でした。本当に空中に飛び出していくような感覚です。

その時の私には、もう今まで自分で立とうと懸命にがんばってきた自分は見えないのです。もうそういう自分は壊れてしまった。どうしようもなく惨めな罪人であって、まったくあてにならないと分かってしまった。だからもう「助けてください」と言って、神様の手の中に飛び込んでいくしかないのです。今自分をまさに呑み込もうとしている、「罪」の恐ろしさから自分を救ってくださるといふ、唯一の救い主イエス・キリストを通して、父なる神様に祈る、それはこれまでの自分をもうすっかり投げ出して、この方にすがるといふことをはじめ、そういうことでありました。だから本当に、「助けてください」と声を出すのは、空中に身を投げるような決断だった。そしてその最初の祈りによって、私は神様を知り始めた。そこから洗礼を受けたいと思うまでは、もう時間はかからなかった。そういう祈りの原体験があります。それは今思いますと、本当に聖霊によって導かれた尊い神との出会いの時でありました。誰も見ていないところで、自分でも自分が見えなくなるほどに、真っ暗な部屋での祈り。それは闇の中での砕かれた罪人の祈りです。自分を全部投げ出して、ただ神の憐れみにすがるといふ、そんな祈りの集中へと、イエス様は私たちを導いておられるのだと思います。

今日はもうずいぶん時間が過ぎてしまいましたので、あとは手短かに申し上げますがお許しください。次に「異邦人のようにくどくどと祈ってはならない」という教えがあります。これも長い祈りをするな、ということではありません。イエス様も何時間も祈られました。しかし、今日は1時間祈ったなどと数えはしなかったのだらうと思います。時間の長さが問題ではない。またとにかく言葉をならべることが問題なのではないのです。

またそういうくどくどとした祈りは、いわば神を脅迫するような、異教的な祈りにつながる危険もあります。インドには「祈りは神々の上にある」ということわざがあるそうですが、私たちは自分の祈りを神よりも上においてはなりません。つまり、祈りによって神を説得しようといひますか、支配しようとしてはいけません。もちろん、神よ私の願いを聞いてくださいといひ、大胆な祈りはゆるされています。詩編の中にも、そういう大胆な祈りがいくつも残されています。いつまで私をほっておかれるのですか、今すぐ憐れんでください、詩篇の詩人たちは大胆に神に迫って、神の御旨を動かそうとする。そういうのは今日の教えなどと比べると、よくない祈りだとされがちですが、聖書の教える祈りの大切な側面でもあります。でもその大

胆さと、祈りによって神を支配しようとする傲慢とは紙一重のものです。神に愛される神の子としての大胆さはもっていいですけど、神の御支配に自分の思いをかぶせるようなことはするべきではないのですね。

むしろ必要なのは、自分を神の支配の中に置くことです。神への完全な信頼の中で、自分の貧しい祈りや願いを超えていくことです。イエス様はこう教えてくださいました「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」願う前から必要なものを全部知っていてくださる・・・。これはすごい言葉です。神は、私たち以上に私たちのことを知っていてくださる方です。その神が、私たちに今一番必要なことをちゃんと知っていてくださって、それを必ず備えてくださる。そのように信じていいのです。そうして備えられることの中には、私たちが避けたいと願うような、災いや試練さえも、時には含まれています。そういうものが、時として私たちに必要であることを神は知っておられるのです。そしてふさわしい時に、それをお与えになります。本当に神は、私に必要なものしかお与えにはなりません。そのことが、信仰の歩みを進める中で、私にもだんだん分かってまいりました。

神は私たちの必要を、私たち以上に知っていてくださいます。この神への信頼にひらかれていく、魂の自由と平安。それが祈りの本質です。イエス様は、そこへと私たちを招いておられます。